



# 万国外科学会（ISS/SIC） 日本支部ニュース

News of Japanese Chapter of International Society of Surgery

発行：万国外科学会（ISS/SIC）日本支部  
〒228 神奈川県相模原市麻溝台2の1の1  
北里大学東病院  
TEL: 0427-48-9111 FAX: 0427-45-5582  
発行者：比企能樹  
編集責任：万国外科学会（ISS/SIC）日本支部広報担当委員・村田宣夫（埼玉医大総合医療センター外科）  
印 刷：Dig印刷 Tel: 03-3551-3060  
年2回発行 1995年4月創刊

## 支部長挨拶

アカブルコの Surgical week  
万国外科学会  
日本支部長  
を終えて

比企 能樹  
(北里大学東病院長)



伝統ある第37回万国外科学会は、メキシコのアカブルコが開催地であった。終日、どこかでマリアッチの聞えるような常夏のリゾート地で、落着いて学会が出来るのか心配しながら出掛けた。

だが、開会式が市のコンベンションセンターで、いつもの大会と同じように厳かな雰囲気で幕が切って落とされ、懸念が晴れたのであった。特に、学会会長であられる出月康夫先生の、実に格調高い英語での各スピーチは、今までのどの会長にもない品格と真摯なお人柄が滲み出て、会員一同から大変好感がもたれた。

次の会長が、オーストラリアのブラウン教授にバトンタッチされたが、出月会長が卓越した英語力を發揮され、眞面目に職務に取り組まれた任期の2年間を、世界各国の代表が万雷の拍手をもって労った。参加した日本の会員として、大きな誇りを抱きつつ、感謝を捧げるものである。

さて学会会場には、ベテランの長老格から新進気鋭の若い人達まで、数多くの日本の会員諸氏が、米国をトランジットして延々20時間程のフライトをものとせず、出席され、心強くも頼もしく感じた。

開会に先立ち、学会事務総長 Ruedi 教授より、日本が積極的かつ優れた演題を多く提出し、その会員も世界で屈指の力を付けたことに対して、身に余る称賛を頂いた。

その期待を裏切らず、会場では連日熱のこもった、極めて高度なレベルの討議が行われ、世界の舞台で活躍する日本の会員諸氏の雄姿がみられた。益々その力を發揮して頂きたいと思う。それには若い外科医諸君は、外科学は言うに及ばず、世界中の学者達と同じ土俵で話が出来るように、英語力をしっかりと身につけて頂きたいと切に希む次第である。

## 会長の任期を終了するにあたって 万国外科学会会长（1995～1997）

出月 康夫

（埼玉医科大学総合医療センター外科教授）



日本支部会員の皆様には益々御健勝のこととお慶び申し上げます。

先月、アカブルコ市で開催されました 37th World Congress of Surgery and International Surgical Week には世界90ヶ国以上から2300名を越す参加者があり、我が国からも350名以上の皆様に参加していただき、盛会のうちに無事終りました。前回のリスボンにひきつづき、今回のアカブルコでも、国別参加者の数では我が国が第1位で会長として大いに面目をほどこしました。ここに改めて感謝申し上げる次第です。

本学会は、外科の国際学会としては最も古い、また最も伝統のある学会であり、2年毎に開催される World Congress はそれぞれの領域の第一級の外科医が参集して行われるため、質的にも極めて高い内容の充実した学会ですが、回を重ねる毎に、我が国の多数の外科医が主要なセッションで活躍されるようになってきたことは、大変に心強い限りです。今回の学会では、一部の free paper session で欠席者が目立ったようですが、これはメキシコへの FAX や E-mail での連絡が必ずしも順調でなく、演題が採用された方々への出欠の最終確認が行われないままプログラムを組まざるをえなかったことにも原因があると聞いています。我が国から参加された先生方にも御迷惑をおかけしたのではないかと、この場をかりてお詫び申し上げます。

万国外科学会は御承知の通り、前々回の香港での世界大会の折に、経済的に大きな損失を蒙り、それを回復するためにこの4年間極めて切り詰めた財政運営を余儀なくされました。会長以下役員は勿論のこと、International Surgical Week への招待講演者にも学会登録費を自分で払っていただくなど、厳しい運営をせまられてきました。前回のリスボンでは、ほぼ、とんとんでしたが、今回のアカブルコの学会では未だ最終決算は出ていませんが、多少の黒字のようで、次回へ少しは繰り越せる見込みと聞いています。

さて、リスボンの学会から今回のアカブルコの学会まで2年間の間、本学会の会長を務めさせていただきました。アジアの国からは初めての会長ということで、

さて、総会では次回1999年の開催地ウイーンの紹介が見事に行われた。ウイーンといえば、かのメッテルニッヒのみならず、医学の歴史でもビルロートを初め綺羅星の先達達が活躍した外科のメッカのひとつと言えよう。

また、2001年は本学会創立100年目を記念して、第一回開催地であったベルギー・ブリュッセルに戻ることになっている。その後、2003年にはアジアで、バンコク開催が承認された。次いで2005年の開催地として、ダーバン（サウス・アフリカ）、モントリオール（カナダ）、ニース（フランス）、シアトル（アメリカ）、ハバナ（キューバ）、イスタンブル（トルコ）の6都市が立候補している。

では2003年の開催地として、日本がアジアで有利と言われていたにも拘らず、何故立候補・誘致を積極的に行わなかつたかを述べておきたい。

つまり、①今回承認されたタイ（バンコック）は、国家の行事としての体制を敷いて、1996年には Postgraduate symposium を誘致するなど積極的に働きかけたため、イスラエルの本部としてもここに決定する意志を仄めかしていた。②アジア地区で日本は、既に1977年に本学会を主催している。③出月会長を日本から送り出している立場上、この際無理押しして日本誘致をゴリ押しすることは、アジア地区のリーダーとして決して好ましい結果をうまないと判断した。以上の理由で、出月会長をはじめ常任幹事の先生方と充分検討した結果、立候補を断念したわけである。

これに対し、ヨーロッパ代表、ことにイスラエルの首脳は、次の機会には必ず日本で開催するべきであると支援を表明してくれているので、日本として今回の立候補見送りは、決して間違いでは無かったと考える。

そこで今後わが国では、国内での受皿を充実させ、そのチャンスをいつでも受け入れられるように備えるべきではないだろうか。私共としては、今から2007年の開催地に立候補できるよう、学会首脳部と絆え間ない密接な関係を保っていくべく、出来るだけ努力を払ってきているつもりである。また、今後もそれが継続するよう力を尽くしたい。

あとは、私共の次の世代の会員諸氏が、日本で総会を見事に成功させるように、大きなうねりを先ず国内から興して頂きたいものと願っている。

非常に光栄なことであり、大変に緊張もし、また私の英語力で果たして務まるのか大変に心配でしたが、各国役員の方々の御支持をいただき、またイスラエル事務局の御協力のもとに何とか任期を全うすることができました。何と言っても、日本支部長の比企先生をはじめ会員の皆様方の暖かい御支援が私には大変心強く、感謝いたしております。日本支部のこれまでの実績を背景に、たまたま私が会長を務めさせていただいた訳で、古くは近藤次繁先生、三宅速先生、塩田広重先生、また斎藤漠先生、島田信勝先生、石川浩一先生、中山文夫先生をはじめ多くの諸先輩の万国外科学会へのこれまでの貢献の賜物であったと自覚しています。

私の任期中に、斎藤漠先生に我が国からは初めて本学会の名誉会員になっていただけたこと、日本支部の比企支部長にアカブルコでの学会の副会長になっていただけたこと、World Journal of Surgery の Editorial Board に我が国から阿部令彦先生、高木弘先生と小生の3人が、また Consultant に馬場正三先生、戸部隆吉先生のお二人に加わっていただいたこと、また我が国の多数の先生方に、香港、リスボン、アカブルコの学会での主要なセッションで座長やパネリストを務めていただけたことは大変に嬉しいことでした。残念だったのは、島田信勝先生を名誉会員に御推薦申し上げるべく準備中に島田先生が亡くなられ、名誉会員になっていただけなったことです。

学会の活動としては、2年毎の World Congress of Surgery and International Surgical Week の開催と World Journal of Surgery の編集発行が何といっても主要なものですが、World Congress of Surgery はストックホルム、香港、リスボン、アカブルコと回を重ねる毎に参加者も増えて規模も大きくなり、また World Journal of Surgery も明年からは月刊となります。Impact factor も上昇し、外科学英文誌の中でのランク付けも、7位へも躍進してきたことは慶ばしいことです。学会として WHO の正式な関連機関として認められたことも国際学会としての status が客観的に国際社会で評価されたことを示すものでしょう。

本会学は、従来から会員資格について極めて厳しい態度をとってきましたが、前回の理事会で、若い研修期間中の外科医でも支部からの推薦があれば、正会員になることができるよう門戸を拡げることが決定されました。従って、今後は世界各国の若い外科医の入会が増えるものと予測されますが、我が国からも多数の若い外科医が本学会に参加され、学会を活性化していただくとともに、若いうちから国際的な舞台でも活躍していただくことを期待しています。そのことが我が國の外科学、外科医療をさらに発展、充実させることとなることを信じています。

比企能樹支部長、山川達郎事務局長の御指導のもとに、日本支部が益々発展されますよう心からお祈り申し上げます。

## 37th World Congress of Surgery (International Surgical Week 1997)

日本支部事務局長

山川 達郎

(帝京大学溝口病院外科教授)



1. 37th World Congress of Surgery (International Surgical Week 1997)は、Congress President ; Prof. Alastier R. Brown (Australia)のもと、8/24-30/1997, Acapulco (Mexico)において盛大に開催された。登録出席者数は1,700名であった。

2. 総会(8/27/1997)記事 :

議長：出月康夫 ISS/SIC会長(1955-1997)

a. 次期 1997-1999, ISS/SIC会長に

Prof. Alastier R. Brown (Australia) が就任

b. 38th World Congress of Surgery (International Surgical Week 1999).

Congress President ならびに President elect 1997-1999 に Prof. Samuel A. Wells (St. Louis, Missouri, USA) が就任

c. 会員数(年会費納入済)：

(7/31/1997現在)：

Active Members ; 3,265

Senior Members ; 679

Honorary Members ; 18

総数 3,962

(内新入会員数 417)

日本支部新入会員数(年会費納入済) : 97 (第1位)

1995-1997年度会員数の推移(退会者, senior Memberを除く) +33 (更なる新入会員の勧誘推進を各国に要請された)

会員数(年会費納入)100名以上の国：

USA 824 Japan 242 Spain 186

Germany 151 Australia 118 Switzerland 104

d. 今後の Congress 開催地；

(1) The Vienna Congress ; (8/15-21/1999)

(2) The Brussels Congress ; (8/19-24/2001)

(3) The 2003 Congress 開催国に Thailand (Bangkok) が決定

(4) The 2005 Congress 開催国に6カ国が立候補

(a) South Africa (Durban) ; 20票

(b) USA (Seattle) ; 14票

(c) France (Nice) ; 7票

その他, Montreal, Canada Havanna, Cuba Istanbul, Turkey

最終決定は research 後, The 1999 Congress にて決定予定。

e. 年会費の増額は、2年間据え置くことが決定。

e. World J. of Surgery 編集委員会報告(編集委員長; Prof. R.K. Tompkins)

採用率 ; 39%, Impact Factor ; 1.8 (一般外科関係雑誌中 第7位)



## 第37回万国外科学会会員総会

於 アカプルコ国際会議場

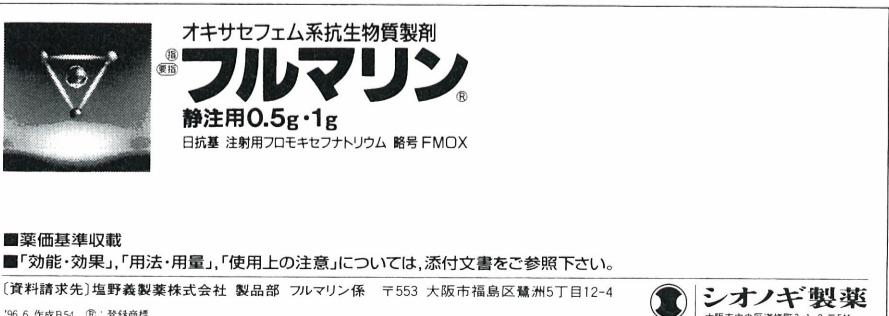
1997年8月27日 10:30から

万国外科学会の会員総会(General Assembly)はいつも Surgical Week のほぼ真ん中の日に行われます。今回も水曜日に行われました。日本人の参加者はそれほど多くありませんでしたが、万国外科学会会員の方々には一度出席されることをお勧めします。世界的に著明な外科医の演説を聴くことができ、質疑応答も活発で楽しく、またいろいろ勉強になります。例えば、開催国の選定の前には立候補した国からの自國紹介があり、さながら旅行案内のような美しい写真・ビデオを見るすることができます。また、今回 Dr.Ruedi が会場からの自由な意見を求めた時、ドイツの医師から、「口演発表はとても素晴らしい英語で行える演者でも、質疑応答になると十分に英語でやりとりできることがある。内容も良く、是非質疑の行方を知りたいのに英語の壁のために質疑が進まない。これは大変残念である。例えば質疑の時に同時通訳を考えられないだろうか?」という意見が出されました。日本人のことを言っているのかな、と思いましたが、この件については、今後、理事会で検討されるでしょう。更に、この総会の後には引き続いて会員だけの昼食会が行われます。無料です。僕たちはたまたま Dr.Rhoads 一家と同じテーブルで楽しい、思い出に残るひとときを過ごすことができました。

山川先生の御報告もありますが、この総会をもっと知るために議案書を掲載します。

### 万国外科学会会員総会・議案

- 1) Call to order and address by the President of ISS/SIC Y. Idezuki, Japan
- 2) Report by the Secretary General Th. Ruedi, Switzerland
- 3) Report by the Editor in Chief of World Journal of Surgery R.K. Tompkins, USA
- 4) Report by the General Treasurer L.O. Farnebo, Sweden
  - a) Audited Statements of Accounts 1995 and 1996
  - b) Budget 1997 and actual situation of accounts
  - c) Budgets for 1998 and 1999
  - d) Suggestions for Membership Fees 1998 and 1999
- 5) Report Chairman of Presidential Commission for Postgraduate Courses J.R. Siewert, Germany
- 6) Report by the Secretary-Treasurer of ISS-Foundation L.M. Nyhus, USA
  - conferment of scholars
- 7) Election of Officers: Nominations Y. Idezuki, Japan
  - President of the 1999 Congress and President elect 1997-1999 Samuel A. Wells USA
  - 2 Councillors Emanuele Lezoche, Italy Raj M. Nambiar, Singapore
- 8) Election of Vice Presidents for the 1999 Congress Y. Idezuki, Japan
- 9) Election of ISS/SIC Program committee for the 1999 Congress Y. Idezuki, Japan
- 10) Re-election and Confirmation of Officers Y. Idezuki, Japan
  - 2nd term in office
  - Secretary General Thomas P. Ruedi, Switzerland
  - General Treasurer Lars-Ove Farnebo, Sweden
  - Editor-in Chief Ronald K. Tompkins, USA
- Confirmation
  - President of ISS/SIC Alastair R. Brown, Australia
- 11) Address by the new Society President A.R. Brown, Australia
- 12) The Vienna Congress report F. Helmer, Austria
- 13) Centennial Congress in Brussels in 2001 B. Niederle, Austria
- 14) Final decision Congress City for the year 2003 Jerusalem or Bangkok R. Van Hee, Belgium
- 15) Presentations and Votes ISW 2005 A.R. Brown, Australia
  - Canadian Section by Dr. B. Langer and Dr. J.L. Meakins for Montreal
  - Cuban Section by Dr. A. Gamcia Gutierrez for Havanna
  - French Section by Dr. A. Fingerhut for Nice
  - South Africal Section by Dr. J. Terblanche and Dr. R. Dawson for Durban
  - Turkish Section by Dr. K. Alemdaroglu for Istanbul
  - US Section by Dr. D.D. Trunkey, Dr. R.K. Tompkins and Dr. C. Pellegrini for Seattle
- 16) Varia Th. Ruedi, Switzerland



### ■薬価基準収載

■「効能・効果」,「用法・用量」,「使用上の注意」については、添付文書をご参照下さい。

[資料請求先] 塩野義製薬株式会社 製品部 フルマリン係 〒553 大阪市福島区鶴洲5丁目12-4

'96.6.作成BS4 登録商標



## 万国外科学会 第3回日本支部会総会議事録

1997年4月10日16:00から17:00 於 京都国際会議場

1. 比企能樹日本支部長の挨拶：新入会員の勧誘促進、他。

2. 庶務報告

1) 会員異動状況(1996年12月31日現在)

会員数は238名(正会員228名、特別会員10名)である。

新入会員数は82名、退会会員数は16名で、増員66名であった。

2) 1996年度日本支部活動報告

3) 1996年度事務局活動報告(スイス本部宛通信)

4. 会計報告

収入合計1,845,564円、支出合計1,049,258円で、当期収支差額796,306円を次期繰り越し金とした。(会計監査：九州大学田中雅夫先生)

5. 1997年度予算案

1) 収入の部

会費収入1,250,000円、広告収入200,000円、前年度繰り越し金796,306円で、収入合計2,246,306円を予定している。

2) 支出の部

会議費300,000円、通信費200,000円、印刷費400,000円、文具費100,000円、交通費80,000円、人件費240,000円、雑費10,000円、予備費100,000円で、支出合計1,430,000円を予定している。

6. 日本支部会則

万国外科学会日本支部ニュース第4号6ページ右下を原案とする。これについて、幹事24名に意見を求める。その結果、返答が16あり、そのうち承が12で、無回答が1であった。意見としては、第2章の「協力し合うのを」を「協力し合うことを」に直すこと、第3章の会員に正会員の他に特別会員と名誉会員を加えること、第5章の会費に具体的な金額を加えることなどの要望があった。その他、第5章の所定の年会費を納めるのは、会員でなく正

第37回万国外科学会・国際外科週間から。

アカブルコでの学会から、編集部が入手した写真の中からいくつかを掲載します。



名誉会員の表彰式。左は出月康夫会長。



会場で。左は座長を勤められた山川達郎先生。



アカブルコ国際会議場入口で。



General AssemblyでのExecutive committeeのメンバー。右から前会長のDr. Michael Trede、会長の出月先生、次期会長のDr. Alastair Brown、アメリカのDr. Loyd Nyhus、メキシコのDr. Antonio Carrasco-Rojas、



アカブルコ国際会議場風景。



アカブルコ旧市街。

多価・酵素阻害剤／一般名：ウリナスタチン (指)(要指)

MIRACLID inj. 25,000/50,000/100,000単位

## 【効能・効果】

(1) 急性潰瘍(外傷性、術後及びERCP後の急性潰瘍を含む)

(2) 急性再発性潰瘍の急性増悪期

(3) 血栓塞栓症

(4) ショック状態が改善すれば、投与を中止すること。

【禁忌】

(1) 次の患者には投与しないこと。

ウリナスタチン製剤に対し過敏症のある患者

(2) 慢性過敏症又はその既往歴のある患者

(3) 過敏性休克患者

(4) 過去にウリナスタチン製剤の投与を受けた患者【過敏症があらわされることがある】

(5) 副作用(主に：0.1%未満、ときに：0.1～5%未満、副腫なし：5%以上又は頻度不明)

(6) 重大な副作用

ショック(主に：シック状態があることがあるので、観察を十分に行い、血圧降下、胸内壓亢進、呼吸困難等があらわれた場合には投与を中止し、適切な対応を行うこと)。

## 【他の副作用】

1) 血栓：まれに白斑症減少、好酸球增多等があらわれることがある。

2) 肝機能：まれにGOT、GPT等上昇等があらわれることがある。3) 過敏反応：ときどき発疹、瘙痒感等があらわれることがあるので、このような場合投与を中止すること。4) 消化管：まれに恶心、嘔吐、下痢等があらわれることがある。5) 注射部位：まれに血管痛、発赤、腫脹等があらわれることがある。

## 【高齢者への投与】

一般的に高齢者での生理機能が低下しているので減量など注意すること。

## 【妊娠・授乳期への投与】

1) 本剤の投与は、一般的なシックの治療法(輸液療法、酵素吸収、外科的処置、抗菌剤等)に代わるものではないこと。

## 【副作用】

本剤は急性潰瘍に用いる場合には、次の点に十分留意すること。

(1) 本剤の投与は、一般的なシックの治療法(輸液療法、酵素吸収、外科的処置、抗菌剤等)に代わるものではないこと。

## (2) シック状態が改善すれば、投与を中止すること。

## 【禁忌】

(1) 次の患者には投与しないこと。

ウリナスタチン製剤に対し過敏症のある患者

(2) 慢性過敏症又はその既往歴のある患者

(3) 過敏性休克患者

(4) 過去にウリナスタチン製剤の投与を受けた患者【過敏症があらわされることがある】

(5) 副作用(主に：0.1%未満、ときに：0.1～5%未満、副腫なし：5%以上又は頻度不明)

(6) 重大な副作用

ショック(主に：シック状態があることがあるので、観察を十分に行い、血圧降下、胸内圧亢進、呼吸困難等があらわれた場合には投与を中止し、適切な対応を行うこと)。

## 【他の副作用】

1) 血栓：まれに白斑症減少、好酸球增多等があらわれることがある。

2) 肝機能：まれにGOT、GPT等上昇等があらわれることがある。3) 過敏反応：ときどき発疹、瘙痒感等があらわれることがあるので、このような場合投与を中止すること。4) 消化管：まれに恶心、嘔吐、下痢等があらわれることがある。5) 注射部位：まれに血管痛、発赤、腫脹等があらわれることがある。

## 【高齢者への投与】

一般的に高齢者での生理機能が低下しているので減量など注意すること。

## 【妊娠・授乳期への投与】

1) 本剤の投与は、一般的なシックの治療法(輸液療法、酵素吸収、外科的処置、抗菌剤等)に代わるものではないこと。

## (2) シック状態が改善すれば、投与を中止すること。

## 【副作用】

本剤は急性潰瘍に用いる場合には、次の点に十分留意すること。

(1) 本剤の投与は、一般的なシックの治療法(輸液療法、酵素吸収、外科的処置、抗菌剤等)に代わるものではないこと。

## (2) シック状態が改善すれば、投与を中止すること。

## 【禁忌】

(1) 次の患者には投与しないこと。

ウリナスタチン製剤に対し過敏症のある患者

(2) 慢性過敏症又はその既往歴のある患者

(3) 過敏性休克患者

(4) 過去にウリナスタチン製剤の投与を受けた患者【過敏症があらわされることがある】

(5) 副作用(主に：0.1%未満、ときに：0.1～5%未満、副腫なし：5%以上又は頻度不明)

(6) 重大な副作用

ショック(主に：シック状態があることがあるので、観察を十分に行い、血圧降下、胸内圧亢進、呼吸困難等があらわれた場合には投与を中止し、適切な対応を行うこと)。

## 【他の副作用】

1) 血栓：まれに白斑症減少、好酸球增多等があらわれることがある。

2) 肝機能：まれにGOT、GPT等上昇等があらわれることがある。3) 過敏反応：ときどき発疹、瘙痒感等があらわれることがあるので、このような場合投与を中止すること。4) 消化管：まれに恶心、嘔吐、下痢等があらわれることがある。5) 注射部位：まれに血管痛、発赤、腫脹等があらわれることがある。

## 【高齢者への投与】

一般的に高齢者での生理機能が低下しているので減量など注意すること。

## 【妊娠・授乳期への投与】

1) 本剤の投与は、一般的なシックの治療法(輸液療法、酵素吸収、外科的処置、抗菌剤等)に代わるものではないこと。

## (2) シック状態が改善すれば、投与を中止すること。

## 【副作用】

本剤は急性潰瘍に用いる場合には、次の点に十分留意すること。

(1) 本剤の投与は、一般的なシックの治療法(輸液療法、酵素吸収、外科的処置、抗菌剤等)に代わるものではないこと。

## (2) シック状態が改善すれば、投与を中止すること。

## 【禁忌】

(1) 次の患者には投与しないこと。

ウリナスタチン製剤に対し過敏症のある患者

(2) 慢性過敏症又はその既往歴のある患者

(3) 過敏性休克患者

(4) 過去にウリナスタチン製剤の投与を受けた患者【過敏症があらわされることがある】

(5) 副作用(主に：0.1%未満、ときに：0.1～5%未満、副腫なし：5%以上又は頻度不明)

(6) 重大な副作用

ショック(主に：シック状態があることがあるので、観察を十分に行い、血圧降下、胸内圧亢進、呼吸困難等があらわれた場合には投与を中止し、適切な対応を行うこと)。

## 【他の副作用】

1) 血栓：まれに白斑症減少、好酸球增多等があらわれることがある。

2) 肝機能：まれにGOT、GPT等上昇等があらわれることがある。3) 過敏反応：ときどき発疹、瘙痒感等があらわれることがあるので、このような場合投与を中止すること。4) 消化管：まれに恶心、嘔吐、下痢等があらわれることがある。5) 注射部位：まれに血管痛、発赤、腫脹等があらわれることがある。

## 【高齢者への投与】

一般的に高齢者での生理機能が低下しているので減量など注意すること。

## 【妊娠・授乳期への投与】

1) 本剤の投与は、一般的なシックの治療法(輸液療法、酵素吸収、外科的処置、抗菌剤等)に代わるものではないこと。

## (2) シック状態が改善すれば、投与を中止すること。

## 【副作用】

本剤は急性潰瘍に用いる場合には、次の点に十分留意すること。

(1) 本剤の投与は、一般的なシックの治療法(輸液療法、酵素吸収、外科的処置、抗菌剤等)に代わるものではないこと。

## (2) シック状態が改善すれば、投与を中止すること。

## 【禁忌】

(1) 次の患者には投与しないこと。

ウリナスタチン製剤に対し過敏症のある患者

(2) 慢性過敏症又はその既往歴のある患者

(3) 過敏性休克患者

(4) 過去にウリナスタチン製剤の投与を受けた患者【過敏症があらわされることがある】

(5) 副作用(主に：0.1%未満、ときに：0.1～5%未満、副腫なし：5%以上又は頻度不明)

(6) 重大な副作用

ショック(主に：シック状態があることがあるので、観察を十分に行い、血圧降下、胸内圧亢進、呼吸困難等があらわれた場合には投与を中止し、適切な対応を行うこと)。

## 【他の副作用】

1) 血栓：まれに白斑症減少、好酸球增多等があらわれることがある。

2) 肝機能：まれにGOT、GPT等上昇等があらわれることがある。3) 過敏反応：ときどき発疹、瘙痒感等があらわれることがあるので、このような場合投与を中止すること。4) 消化管：まれに恶心、嘔吐、下痢等があらわれることがある。5) 注射部位：まれに血管痛、発赤、腫脹等があらわれることがある。

## 【高齢者への投与】

一般的に高齢者での生理機能が低下しているので減量など注意すること。

## 【妊娠・授乳期への投与】

1) 本剤の投与は、一般的なシックの治療法(輸液療法、酵素吸収、外科的処置、抗菌剤等)に代わるものではないこと。

## (2) シック状態が改善すれば、投与を中止すること。

## 【副作用】

本剤は急性潰瘍に用いる場合には、次の点に十分留意すること。

## 特別寄稿

### Société Internationale de Chirurgie と私

石川 浩一

（関東労災病院名誉院長）



Société Internationale de Chirurgie は Bern の Kocher 教授を会長として第1回会議を1905年 Brussels で開催し、その後 Brussels に本部をおいて、第2回 Heidelberg の Czerny 教授、第3回 Paris の Lucas-Championniere 教授など著名な外科教授を会長として3年毎に続けられた。日本からは欧州に留学した近藤次繁・三宅 速教授を始めとして多くの外科教授が会員となっていた。

私は欧州に留学した教室員からこの学会が特に欧州で重要視され、第2次大戦後には2年毎に開催されていることを聞き、1967年 Lund の Sandblom

教授を会長として Wien で開催された第22回会議に始めて参加し、早期胃癌の外科的治療の演題が採用された。この為か1971年 Moscou の第24回会議で、日本の会員30名の中で日本医科大学斎藤謨教授が Délégué に、私が Member に選ばれていた。次ぎに1973年 Heidelberg の Linder 教授を会長として Barcelona で開催された第25回会議に参加したが、この頃次回に日本開催の意向があることを聞き、斎藤教授を中心とする準備の陣容に加わった。

1975年 San Francisco の Gerbode 教授を会長とする第26回会議が Edinburgh で開催され、ここで次回は日本の斎藤教授を準備委員長として企画することが決定した。そして斎藤教授は、第27回を英国 Aylesbury の T.H. Sellors 教授を会長として、1977年9月に京都市京都会館の4会場で開催するよう準備を始められ、私は Program 委員長を拝命した。私は阿部令彦・馬場正三など英語に堪能な方々を委員にお願いして演題募集と program 作成に当たり、1977年3月には Brussels の program 委員会に出席した。なお Symposium には Acute Abdomen, Surgery of Replacement と Parenteral Nutrition が取り上げられ、演題総数は248題となった。また、この頃欧州23国、米州10国、アジア15国、アフリカ7ヶ国からの会員があったが、第27回会議には欧州18国、米州7国、アジア6国から出題参加があった。

## 特別寄稿

### 第37回万国外科学会（ISS/SIC）で感じたこと

高見 博（帝京大学医学部第一外科教授）

第37回万国外科学会（ISS/SIC）が8月24日から30日までアカプルコで開かれた。かなり前より本学会に参加している小生にとって、今回のアカプルコは暑くかなりこたえたが、学会の内容はその暑さを吹き飛ばすほど良いものがあったと思っている。

この度は1995年に Congress President になられた出月康夫教授が ISS/SIC の President として活躍された。また、Congress Vice-President には比企能樹教授がなられた。小生は Congress President による会長招宴にも出させていただいたが、出月教授のご挨拶は格調高く、単に言葉が流暢であるという次元を越えたものであると感じた。医学、医療のみならず、社交、人間同士のふれあいにおいても、日本人のレベルを高めて下さったと考えている。

本学会への日本人の参加者は300名を数え、Mexico を除けば USA の約3倍になる。それに伴い、日本人の役割も大きくなってきたと思う。しかし、それをまっとうする上での大きな障害として言葉と風俗・習慣の違いがある。特に、日本語は発声上も、文法においても、英語と余りにかけ離れているため、日本人は会話では非常に不利である。しかし、医学、医療や社会面でもこれだけ力をつけてきたのであるから、国際社会に通用する流儀に従い、日本性の良さを主張しつつ、国際学会をリードしていく時期に達したと思っている。

本学会の機関誌は World J.Surg であり、近年 Impact factor も急上昇し、外科系の雑誌では20番前後にランクされ、その Impact factor も1.2を越えている。それも、この学会がよく評価されてきていることを思えば素直に納得できる。

さて、学会の各論については、小生の専門の内分泌外科についてふれさせていただいく。国際内分泌外科学会（IAES）は1989年の第28回の San Francisco で ISS/SIC に Integrated Society としてはじめて参加し、以後1981年に Montreux, 1983年に Hamburg, 1985年の Paris へと続いてきた。口演演題も最初の頃は少なく、1981年の Montreux (第29回) では口演は29題にすぎなかったが、今回は50題にも達している。国際内分泌外科学会（IAES）では、演題の採択率もかなり厳しいが、その分、口演演題は毎年 World J Surg に特集号で掲載されている。この進歩のかいつまんでみると、1981年の学会では例え Surgey of single thyroid nodules—a twenty-two year experience, The incidence of multiple endocrine neoplasia type 1 or 2 patients with primary hyperparathyroidism などといった単に臨床データーの集積にすぎない総括的なものが多く、現在とは隔世の感がある。これだけ情報交換の手段が発達した現在でも、人と人のふれあいから得る情報はまた意味あいも違ひ、国際学会の果たす役割はあると思っている。



国際内分泌外科学会（The International Association of Endocrine Surgeons, IAES）会長の Dr. Orlo H. Clark (San Francisco) と小生



出月康夫教授と比企能樹教授  
(8月23日の Presidential dinner 前の cocktail において)



8月24日の Opening Ceremony (Acapulco Convention Center)

## 編集後記

◆アカプルコでは学術集会とともに種々のレセプションが開かれた。そのうちの一つで壇上の出月康夫会長が「英語で冗談を言うのは日本人にとって実にむづかしい」ということを英語で仰った。それは一つのユーモアで会場を沸かせたのだが、perfect English の出月先生ですら英会話の難しさを感じておられるようである。

◆国際社会でどうして英語が共通言語になったのだろうかとふと思うことがある。世界ナンバーワンの国を自負するアメリカ合衆国の公用語であるからか、かつて7つの海をイギリスが支配していたからか、英語が学習には容易であるからか、英語国民がうまく立ち回っているためなのか、・・・だんだん理屈ではなくなるてくる。ただ、万国外科学会の学術集会に出席して、英語で口演発表することの不便さを感じた先生方は多いことと思う。日本人の負う英語のハンデを近い将来何とか解消できないものであろうか。（村田宣夫）